

アイサップ ニュースレター

第5号

2007年9月15日発行

ISAPHはラオスとマラウイの母親と子ども
たちの保健の向上を支援しています



NPO International Support and Partnership

写真：ラオスの朝、学校へ通う子どもたち



ISAPH は設立から 2 年半、地域保健の向上、災害緊急医療支援、人材育成支援を 3 本の柱に事業を推進しています。ラオス国中部カムアン県の母子保健プロジェクトにおいては、県保健局及びセバンファイ郡保健局関係者などラオス保健省機関と連携し、カンペータイ地区での地域保健ボランティアへの乳幼児成長モニタリング、予防接種管理、栄養教育などの研修後のフォローアップ活動、水の衛生に関する健康教育普及活動を推進しています。また、コミュニティでの活動を通し、乳幼児死亡が極端に高い地区があることを把握し、原因究明のために栄養を中心とした調査をシーブンファン地区などで実施しました。

セバンファイ郡カンペータイ地区で VHV 研修のフォローアップを実施

VHV 育成のため、2006 年 5 月と 9 月に、①予防接種時の VHV の役割とその実習、② Growth monitoring（乳幼児発育測定）の実技演習、③セバンファイ郡で子どもの主な病気に対する DRF（drug revolving fund：医薬品回転資金制度・村の置き薬）による対応と管理方法を実施しました。研修後に、VHV とカウンターパートである郡保健局スタッフ並びにヘルスセンター職員により VHV 活動が推進されていますが、それらの活動支援を行うとともに、実施状況をモニタリングし、またフォローアップするために以下のような活動を行いました。

- ・ VHV による 5 歳未満の小児の体重測定支援
- ・ 成長カードへの記入状況のフォローアップ
- ・ 体重記録ノートの記入状況のフォローアップ



VHV 研修後のフォローアップで、体重測定の仕方を復習しています

・ヘルスセンター職員と ISAPH のローカルスタッフを中心に、低体重児をもつ母親からの情報収集とその原因究明についての支援

・低体重児をもつ母親に対し、ヘルスセンター職員と ISAPH ローカ

ルスタッフによる栄養と衛生教育の実施支援

コミュニティで重要な栄養指導

栄養指導の活動は、2006 年の 11 月より VHV 活動に併せ、継続的に実施しています。体重測定の対象となる子ども（1 歳～5 歳未満）と母親にお菓子を出し、コミュニケーションの場を提供し、和やかな雰囲気の中で、郡保健局、ヘルスセンター職員、ISAPH ローカルスタッフ



水につけておいた大豆をつぶして豆乳を作っています

の人たちと栄養や衛生について話し合えるような環境を整えました。

2007 年の 2 月からは、高タンパクで栄養価の高い豆乳を体重測定に来た乳幼児の母親たちと一緒に作り配布しました。栄養指導のポイントとしては、①低タンパク体質である一般住民に、タンパク質の摂取の重要性を伝える、②貧困層の多い村人の状況を考慮し、低価格で入手可能な食材を使用する、③豆乳の作り方を教え、家庭でも豆乳を作り飲むことができるよう指導する、としました。

また、個別の栄養・衛生指導は2006年の12月よりヘルスセンター職員を中心として低体重児の家庭を訪問し、経済状況、衛生状況、乳幼児の健康状態、食事の摂取状況などの聞き取り調査を行いました。これらの調査目的は、子ども

の体重が増加しない原因を探るためであり、その家庭調査の報告にもとづいて適切な栄養指導や衛生指導を実施しました。

乳児死亡の多発地域で調査を行い、その死因が脚気（ビタミンB1欠乏）によることがほぼ判明しました

乳児死亡の原因を探るためにバーバル・オートプシーを試みました

ラオスのカムアン県シーブンファン地区では、2005年の1年間の乳児死亡率が31.6%と異常に高いことが分かりました。その原因を調べるために、バーバル・オートプシーという方法を用いて調査を行いました。バーバル・オートプシーというのは、“聞き取りを通じて死亡原因の疾病診断を行う”もので、途上国ではふつう妊婦死亡の原因を探るために行われます。子ども、とくに乳児のバーバル・オートプシーというのは、あまり聞いたことがありませんし、診断の信頼性には欠けると思われますが、他に方法がないため、あえて実施を試みました。

シーブンファン地区の34人の乳児死亡についてバーバル・オートプシーを実施した結果、乳児脚気と診断されたケースが16人（47.1%）に見られ、他の死因としては下痢5人、出生児の感染症4人、肺炎、脳炎、マラリアがそれぞれ2人でした。また、死因不明は3人でした。乳児におけるバーバル・オートプシーは不確かな面があっても、脚気による死亡が半数近くに診断されたという点は今後の調査を進める上で大きな成果があったと考えられます。

カムアン県で母親のビタミンB1測定と栄養調査を実施

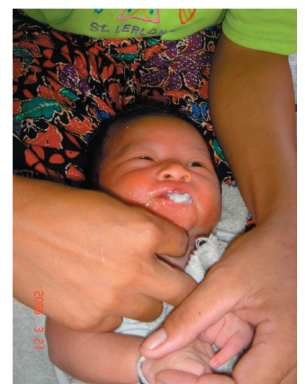
ISAPHの活動を行っているうちに、地域によって乳児死亡率に大きな差があることが分かりました。これらの乳児死亡の原因について、ラオスの専門家や国際機関の人たちと話し合ったところ、乳児脚気が強く疑われるようになりました。

た。乳児脚気は、生後1～3カ月に起こりやすく、泣きやまないとか呼吸困難の症状が出て、その日のうちに死んでしまう重症の病気です。母親にビタミンB1欠乏があることが背景になっていると考えられます。

そこで、ISAPHでは、聖マリア病院国際協力部、



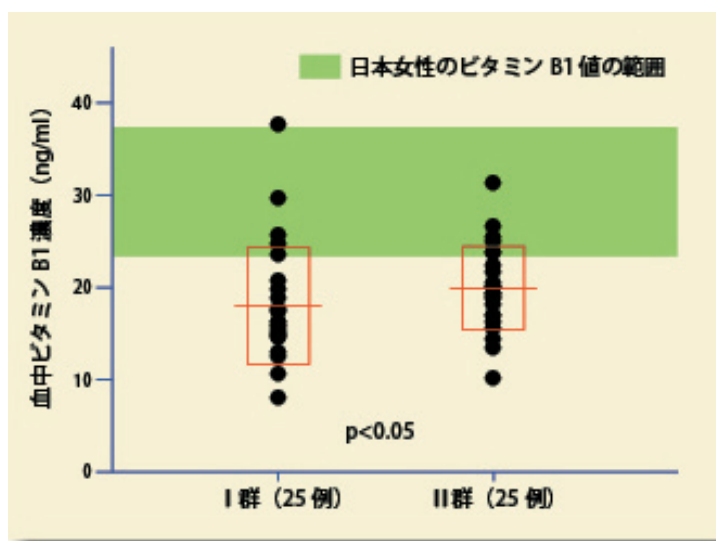
調査員（右側の女性）が母親に質問票を用いてインタビューしています



もち米を噛んで柔らかくしたものを乳児期早期から与えているため、赤ちゃんは母乳をのむ量が不足しかねません

東京女子医大国際環境・熱帯医学教室、タケダライフサイエンス・リサーチセンターと協力して、2006年10月30日から11月2日まで、シーブンファン地区とハートカムヒエン地区からそれぞれ25世帯の計50世帯を対象に世帯調査を実施しました。また、母親から血液と母乳を採取し、血中および母乳中のビタミンB1値の測定も同時に行いました。

調査の結果、乳児死亡率の高いシーブンファン地区における母親のビタミンB1値は乳児死亡率の低いハートカムヒエン地区の母親に比べて有意に低いことが明らかになり、また、両方の地区ともに血中および母乳中のビタミンB1値は日本人の母親と比べてかなり低いことが分かりました。つまり、今回の調査によって、乳児死亡多発の原因の多くがビタミンB1欠乏にもとづく脚気によることがほぼ示されたこととなります。また、母親のビタミンB1が欠乏する理由として、部族の種類、貧困の程度、妊娠・出産後の食物タブー、主食であるもち米の調理方法、低い母親の教育レベルなどが関連していることも今回の調査で明らかになりました。



授乳中の母親の血中ビタミンB1の測定結果を示しています。I群は2005年の乳児死亡率が最も高かった地区で、II群は死亡率が最も低かった地区です。I群の方が母親の血中ビタミンB1値が低く、また、どちらの地区も日本女性の値と比べてもかなり低いことが分かります

乳児脚気に対する取り組みを開始

ISAPHによる世帯調査の結果、とくにシーブンファン地区では、乳児脚気による死亡が多いことが分かり、早速、その対策への取り組みをはじめました。



JICafe (JICAとNGOの連携促進の場)でビタミンB1欠乏の調査結果を報告しました

ビタミンB1欠乏に対する取り組みとしては、母親へのビタミンB1サプリメントの投与、栄養指導や食生活の改善指導、乳児に対する哺乳育児の改善など個々の住民に対する働きかけとともに、妊婦登録・出生登録と乳児のフォローアップ、コミュニティの乳児脚気に対する知識・自覚の向上が重要です。また、乳児脚気は、ISAPHの活動しているカムアン県に限られた問題とは考えにくく、ラオス全体に広がっている可能性があります。そのため、ラオス保健省の母子保健関係者やドナー、援助機関に対する働きかけを行うとともに、情報交換やさらなる必要な調査を行い、ビタミンB1欠乏についてラオス全体の状況を明らかにすることが重要です。

ISAPHは現在、乳児脚気の最も多かった地域を対象に、母親へのビタミンB1サプリメントの投与などの予防活動を実施しています。今後、関係者と協議しながら、必要に応じて、新たな調査の実施などこの課題に積極的に関わっていく必要があると考えています。

ISAPH はラオスのフィールドを人材育成の場として活用しています

聖マリア病院臨床研修プログラム 「国際保健コース」のフィールド研修

昨年度に引き続き、今年度も聖マリア病院から研修医 2 名を受け入れました。研修期間は平成 19 年 2 月 9 日から 20 日までの 12 日間で、ISAPH では研修の支援として、保健医療施設やコミュニティの視察、住民に対する調査活動での通訳等の便宜供与を図るとともに、ラオス保健省関連機関との調整などを行いました。



赤ちゃんの身長計測の研修をしています

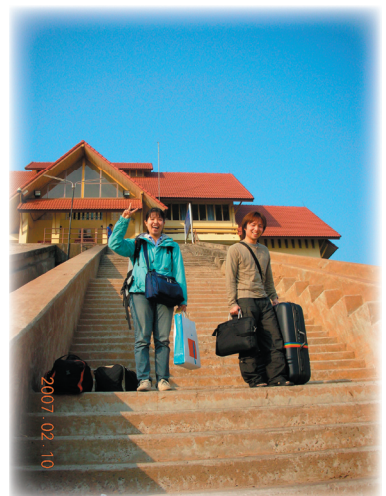
国際保健医療学会学生部会フィールド マッチング企画による研修を受け入れ

国際保健医療学会の学生部会では、国際保健の分野で活動している専門家や機関といっしょに現場を体験し、その経験を他の学生と共有することを目的に学生フィールドマッチング企画が実施されています。ISAPH では、今年度この企画から 1 名の研修を受け入れました。研修ス

マラリア調査に対する協力を行いました

東京女子医大国際環境・熱帯医学教室に留学中のラオス国保健省マラリアセンター所属の医師ボアラム氏の依頼を受けて、ISAPH ではマラリア調査に協力しました。調査は 2006 年 11 月 19 日から 12 月 4 日まで、ラオス・カムアン県のボラパー郡とセバンファイ郡の 2 郡で行われました。調査の内容は、住民のマラリア感染調査、質問紙を使ったマラリアに対する KAP (knowledge, attitude, practice : 知識、態度、実行の住民調査) 調査、および媒介蚊に関する調査でした。

ケジュールは、聖マリア病院「国際保健コース」と同じく事前研修やアクションプランの作成に参加し、また、ラオスの研修では研修医に同行しました。今回の研修で有意義な成果が得られたことが報告されています。



メコン川を船で渡るためにタイ側（ナコンパナム）のイミグレーションから急な階段を下り船着場へ向かう

東京女子医大国際環境・熱帯医学教室 からの視察研修を受け入れ

東京女子医大の教育プログラムである自主選択国外実習の候補地として、同大学国際環境・熱帯医学教室は、将来実習が可能であるかについての事前調査と保健医療事情の視察研修を兼ね、国際協力に関心の高い 3 名の学生とともにラオス・ビエンチャン市内およびカムワン県の視察を実施しました。実施期間は、平成 19 年 3 月 28 日から 4 月 6 日の 10 日間でした。ISAPH は、カムワン県内における医療機関の視察の調整並びにラオスにおける保健医療について説明を行い視察研修に協力しました。

ラオスってどんな国？（1）

朝の風景 5時～7時

ラオスは仏教国です。町のいたるところにお寺があり、朝の6時ころになると托鉢が始まります。



ラオス人は信心深く、毎朝蒸したてのもち米（ラオス人の主食）やお菓子などを托

鉢するために家の前に座ってお坊さんが来るのを待ちます。

子どもたちは家事の手伝いから、両親の仕事の手伝い、時には自分たちだけで空き缶やペットボトル、鉄くずなどを拾って換金したりします。



村人が小船に食材を積んでメコン川を下って来て市場へ出荷。早起きすればここで卸値で食材の購入ができます。



朝市の風景

市場は朝市・夕市とあり、食材は豊富にあります。日本と違ってパック売りはされていない

ので必要な分だけ、個数やグラム数で買います。言い値より多少安くなることもありますが、そもそも庶民の市場では法外な値段を吹っかけてくる事がないため他のアジア諸国のような値段交渉は必要ありません。もちろん大量に買えば



「これおまけして!」といえは7～8本は袋に入れてくれます。



はじめのうち、肉類を買うのに戸惑います。鶏は丸々1羽、豚肉も頭・足など形がはっきりしているの・・・しかし慣れてしまえば大丈夫。今では私も鶏の頭を躊躇無く切り落とすことができます。（篠原久美子）

ラオスのナショナルスタッフ紹介

私は、ISAPH ラオスプロジェクトでコーディネータを務めています。エクト・ボンバックディ (Ekto Vongphakdy) です。現在、私は事務管理とフィールドワークの両方の責任者を務めています。ISAPHに勤務し1年が過ぎましたが、時間を守ること、そして自分自身の考えをはっきり伝えることなど、自分自身が大きく変わったと感じています。私はISAPH LAOSで働く機会を得られたことをとても幸運であると思っています。





マラウイは東アフリカにある世界で最も貧しい国の1つです。今から5年前の2002年に、マラウイの北部にあるムジンバ県のムジンゲという村に、聖マリアグループ職員の皆様方からの寄付金によってヘルスポストを創設しました。ISAPHでは、2005年の設立時から、ムジンゲ村のヘルスポストをベースにコミュニティの人たちによるプライマリヘルスケア活動を支援しています。

マラウイのムジンゲ村に建設されたヘルスポストでの活動進捗状況の把握と今後のISAPHの支援について検討するために、6月14日から24日までマラウイを訪問しました。現地関係者（チャリティさんとジワ夫人）と打合せの後、ムジンゲを訪問し村の保健要員（HSA: health surveillance assistant）やその他の関係者と話し合いを行いました。

現地の問題点として、施設の備品等についてムジンバ病院からの支援がなかったこと、職員住宅の建設が遅れていること、薬が不足していることなどが挙げられ、それぞれについて適切な対応策がとれるように協議しました。



ヘルスポストの概観

ることなどが挙げられ、それぞれについて適切な対応策がとれるように協議しました。

また、今回のマラウイ訪問を機に、JICA事務所やWorld Vision Japanの関係者と情報交換したり、CHSU（community health sciences unit）のマラリアやIMCI（integrated management of childhood illness）担当者とも話し合いを行うことができました。

ISAPHの今後の支援としては、現地活動のフォローアップをきっちり行うことが重要であり、マラリア、HIV/AIDS、リプロダクティブヘルスの分野での可能なサポートについて検討が必要と思われました。



ヘルスポストでの村人との話し合いでジワ夫人がスピーチしている

（齋藤智子）

ISAPH 定例総会・理事会を開催

本年5月19日にISAPH定例総会・理事会が開催されました。総会では平成18年度事業報告及び決算報告が、理事会では平成19年度事業計画とその予算についての審議が行われ、すべての議案が承認されました。

平成18年度事業報告では、海外事業を主軸に2年目を迎えたラオスのカムアン県母子保健プロジェクトをメインに推進したこと、ジャワ島中部地震での救援活動においても聖マリア病院のご支援を頂き合同で実施したことなどが報告されました。

平成19年度の事業内容としては、地域保健向上支援事業として、ラオス・カムアン県母子保健プロ

ジェクトとマラウイのムジンゲコミュニティ支援プロジェクトの推進、そして国内においても沖縄県離島医療支援として医師確保支援活動が計画されています。

保健人材育成支援事業は、聖マリア病院臨床研修「国際保健コース」と国際保健医療学会学生会マッチング企画によるフィールド研修、そして東京女子医科大学国外視察研修などをISAPHラオス事務所が支援する計画が報告されました。

さらに、平成19年度の課題としてISAPHの管理運営体制の強化と財政状況の改善、そして広報強化に取り組むとの報告がありました。（磯東一郎）

ISAPH の歩み

- ・10月30日～11月2日 ビタミンB1測定と栄養に関する調査を実施（ラオス）
- ・11月10日 芝田澄子さんがISAPHラオスより任務を終え帰国
- ・11月15日～17日 VHV研修のフォローアップを開催（ラオス）
- ・11月19日～12月4日 東京女子医大のマラリア調査支援（ラオス）
- ・12月15日～17日 VHV研修フォローアップ（ラオス）
- ・12月23日 芝田澄子さんが兵庫県立大学地域ケア開発研究会で「ラオスでの保健ボランティアの育成や村組織の活性化に向けた活動」について講演
- ・1月15日～17日 VHV研修フォローアップ（ラオス）
- ・1月17日 芝田澄子さんが、「ラオスでのNGO活動」をテーマに、第57回聖マリア医学会研究会で発表
- ・1月26日 芝田澄子さんが大阪市立総合生涯学習センターで「看護師としてラオスの病院や地域保健に関わってきた活動体験」について講演
- ・2月15日～17日 VHV研修フォローアップ（ラオス）
- ・2月10日～19日 聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」フィールド研修の受け入れ（ラオス）
- ・2月15日 磯事務局長が「開発途上国での国際協力得た経験から」をテーマに足立区立第11中学校にて講演（東京）

- ・2月19日～21日 JICafeにて広報活動（ラオス）
- ・3月3日 芝田澄子さんが「ラオスにおけるビタミンB1欠乏によると思われる乳児死亡例の多発」を第25回日本国際保健医療学会西日本地方会にて発表（名古屋）
- ・3月23日 ISAPH臨時総会・理事会開催
- ・5月2日～4日 VHV研修およびカン地区、シーブンファン地区対象とし妊婦・出生児登録の研修を実施（ラオス）
- ・5月19日 定例総会・理事会を開催
- ・5月22日～25日 研修後のカン地区のフォローアップ（ラオス）
- ・6月9日 表澄子（旧姓芝田）さんが日本看護協会主催シンポジウム「世界の健康問題と国際看護活動～これから目指す看護者のために～」で講演
- ・6月11日～25日 齋藤智子さん（ISAPHテクニカルアドバイザー）がアフリカ・マラウイ国ムジンゲコミュニティプロジェクトの進捗状況確認及び今後の支援検討のため派遣

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	湯川 武	慶應義塾大学商学部教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際協力部
理事	渡部 和男	神戸大学大学院経済学研究科教授
理事	樋口 敬記	内山緑地建設株式会社代表取締役社長
監事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

特定非営利法人 ISAPH 東京事務所

〒105-0004 東京都港区新橋 3-5-2

新橋 OWK ビル 3階 NPO 法人 ISAPH

TEL 03-3593-0188 FAX 03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/index.html>

振込先

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人 ISAPH

口座番号 00180-6-279925

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員

入会 30,000円 年会費 30,000円

一般会員

入会金 3,000円 年会費 3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、下記東京事務所までご連絡いただければ幸いです。



ISAPH Newsletter 第5号 編集スタッフ
中野博行 磯東一郎